釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□上□

財団法人釧新教育芸術振興基金（春日井茂理事長）は2007年度（第36回）「釧新郷土芸術賞」の受賞者を決定した。具象にこだわりながらもファンタジックな作品を描く日本画家、釧路市の高橋潤氏（42）、国内外で活発な演奏活動を続け高い評価を得ている釧路市の木原奈津子氏（38）、釧路に地域演劇を根付かせ推進役を果たしている劇団「東風」（片桐茂貴代表）の2個人1団体。受賞者の横顔や団体の歩みを紹介する。

女性が登場する風景画の初期の作品という「零（れい）～久寿里橋」と高橋さん

生と死、再生テーマ

地域風景と人物幻想的に

日本画

高橋　潤さん（42）

（釧路市）

道展に4回入選

美術教師として生徒の指導をする一方、「自分も現役の画家であり続けたい」と語る。2006年道展で新人賞を受賞。今年も4回目の入選を果たした。「尊敬する羽生輝先生（日本画家・第1回受賞者）が受賞した賞をいただけるなんて、とても光栄」と笑顔を見せる。

土別市に生まれ、道教育大札幌校の特設美術工芸科で日本画を専攻。卒業後、釧路市立桜が丘中学校に赴任。鶴居中、大楽毛中を経て、04年4月北陽高校に赴任した。一時期、忙しさに紛れて絵から遠のいたことがある。再び絵筆を執るきっかけは、夫人の存在だった。最初は夫人をモデルに肖像画からスタート。現在も道展に出品するような大作には、夫人の像が必ずモチーフとして現れる。「最初は見たものを素直にという写実。この数年、風景や人物を組み合わせたファンタジックな絵になってきた。でも具象からは離れず、メッセージのある絵を描きたい」と、自身の絵を分析する。

久寿里橋から見た風景にほの白い女性が浮かぶ「零（れい）」、洪水の後の雪裡川に人が横たわり、緑が再生する「ボーダー」など、緻密な地域の風景描写に、生と死を象徴する人物が描かれる。テーマは生と死、そして再生。

教え子は全国へ

「生徒に影響を受けます。高校生はとても生と死とに敏感。死が身近にある存在だと思います。絵が好きで純粋に描く姿勢にも触発されています」。北陽高校美術部の教え子たちも、そんな高橋先生に導かれ、高文連の全国大会へ、3年連続で出場を決めている。

ズリ山のあるまち並み、幣舞橋から眺める釧路川…「描くべきものは身近にあると思う。これからも新しい表現を取り入れながら、こつこつ描いていきたい」。

（坂上めぐみ）